

郷土あらいこい

郷土館だより
第41号

五日市町立
発行 五日市町郷土館 東京都西多摩郡五日市町五日市920-1 電話 0425・96・4069

武州南一揆の話 五日市の中世



武州南一揆の碑 戸倉三島神社入口

1. はじめに 中世とはどんな時代か

歴史年表によると、中世は源頼朝が征夷大將軍に任ぜられ、鎌倉に武家政権を樹立した1192から、織田信長が戦国の動乱を一応征覇し、將軍足利義昭を追放した1573までの400年をいう。ただ関東では後北条氏が秀吉によって滅ぼされた1590（家康江戸入府の年）を以って中・近世の区切りとしている。

中世は日本史上画期的な民衆の生活向上期で、農業生

産力の上昇を基盤に、手工業が発達し、交易が全国的に盛んとなった時代である。又中国との国交も再開され、貿易も始まり、中国銭が流入、我国の通貨となり、全国各地に定期市が開かれ、金融業者（質屋・金貸し）が社会に重大な影響力を持ちはじめた時代である。反面、武力による権力争い、所領争いが続発し、法よりも暴力が優先する時代であった。暴力殺りくは日常茶飯のこととされ、死生の淵に立たされることの多い人々は神仏に慰藉・救済を求めた。末法思想の滲透とあいまち、中世は人々が浄土を希求して止まない宗教の世紀ともいえよう。庶民層を対象とした新仏教の興隆期であった。

従来、中世即暗黒時代と思う向きがあるが、実は戦乱・天災・飢饉の頻発にかかわらず、この世紀（13～16）の人口は、それ以前のどの時代より急激な上昇率を示している。泰平の江戸300年はかえって横バイの時代であった。

中世を前期の鎌倉時代、中期の南北朝、後期の室町時代と区分すると、動乱の最も激しい南北朝期から、庶民生活の向上がいちぢるしい、支配者たちが争乱にあけられている間、庶民は農業生産の改善にうち込み、余剰の蓄積につとめた。現在の村の原型もこの頃にできた。村には寺や祠堂が建てられた。

五日市地区の場合も全く同様な状況がうかがえる。村人は開墾にうち込み、何々カイト（垣内）と呼ばれる開墾地の確保につとめた。（筆者の住む五日市小学校前は原ガイト、五日市中学校周辺は大ガイトという）。また五日市地区の寺の大半はこの14、5世紀に創設されている。

（詳細後述）

村のリーダーの有力農民は若干の下人を持ち、多少なりとも余裕のある土地を確保し、時にその一部を他に貸与して加地子（一種の小作料）をとった。当時は一般農

民も多少の武器は所持したが、リーダー格の富農層ほど武備を嚴重にした。歴史上地侍と称される人々がそれである。彼らは村をこえて連帯し、内に対しては村人を威服させ、外に対しては団結による戦闘力を誇示した。一方領主層は彼ら地侍の掌握に心をくだいた。彼らの向背がそのまま自己の勢力の消長に関係したからである。

この在村武士集団は一昔前の武蔵七党のような血縁集団ではなく、地縁によって結ばれているので、連帯の証に、神前などで一味同心の盟約を結び、「何々一揆」などと称した。群小地侍による一揆集団の結成は彼等が乱世を生きぬく知恵であった。

2. 武州南一揆

五日市地方の在郷武士は武州南一揆と名乗る集団を結成していた。南一揆に関する文書資料は町内戸倉の三島神社と阿伎留神社等に計17通ある。年代は応永20年(1413)～永享12年(1440)(下限の年は内容より推定)。内容は鎌倉公方足利持氏の御教書で、上杉禪秀の乱に関する出陣の指令や恩賞状である。また関東管領上杉憲実の発した結城合戦への出陣要請書がある。これらの文書から、武州南一揆はその本拠を戸倉地区にもつ秋川谷の在郷武士団であると推定される。もっとも、より広範囲の集団とみる見解もある。例えば『東京百年史』では南一揆は多摩地区の地侍由井・河口・立川・山口・師岡・小宮・梶原・平山等を含むと推論している。ここにあげた諸氏のうち、小宮氏は秋川流域に庶流多く分布しており(小宮十八流・十八騎などと称される)恐らく南一揆の棟領株であろうが、他の諸氏は同盟者であっても一揆の構成員ではあるまい。応永20年の南一揆あて御教書には「平山に合力して云々」とあり、平山氏が一揆の外部者であることを示す文言がある。

南一揆は秋川・平井流域の地侍集団で、木住野、萩原、網野、土土田、宮本、戸倉(富蔵)等戸倉地区の地侍を多く含むが故に、文書が戸倉三島神社に残ったのではあるまいか。

ここで、南一揆がどのような活動をしたか。当時の合戦記録『鎌倉大草紙』によってみよう。応永23年12月南一揆は江戸、豊島氏と共に公方持氏側につき、謀反者上杉禪秀軍と戦っている。戦は敗れたが、將軍義持の急援によって、非勢の持氏が立ち直り、禪秀の自殺によって結着した。恩賞として、江戸・豊島氏には所領を、南一揆は5年の年貢免除という恩典を得た。次ぎに永享11年(1439)公方持氏は將軍義教と対立し、將軍側につい



日供・炭・油を除く公事(年貢)5年免除の状

た関東管領上杉憲実を攻めた。南一揆ははじめ公方方にお味方したが、公方危ふしとみるや直ちに上杉方に鞍替えした。武蔵・上野の一揆と共同の行動で、優勢の側に赴くのは戦国の習いである。持氏は捕えられ、切腹し、関東は上杉の勢力に服した。世に「永享の乱」という。翌年、持氏の遺児を擁し、結城氏朝が兵を挙げ、反上杉勢力が結集して結城の城にたてこもり、関東を二分する合戦となった。上杉憲実は南一揆にも出陣を促したが、南一揆は動かなかった。遠隔の地まで出陣するメリットがないと判断したらしい。多摩の地侍たちも出陣していない。互いに情報を取りかわし、行動を決しているようである。結局、結城の城は落ち、遺児たちは殺されたが、一人生き残った成氏が將軍の命により鎌倉公方に復活した。成氏の周囲には反上杉勢が集まった。成氏は父と兄の仇上杉憲実の子憲忠を誘殺し、関東は又動乱に突入した。享徳4年(1455)將軍の支持を失った成氏は急激に力を失い、鎌倉を退去、武蔵府中へ向かった。『鎌倉大草紙』によると、この途中南一揆が単独で襲撃している。敗残の軍勢とみて襲ったものらしい。結果は意外に手痛い反撃をうけ、若杯を喫している。以上が南一揆の戦績のあらましである。いかにもアマチュア軍団らしいが、五年間の年貢免除の獲得は上出来であった。所で平山三河入道が自分の所領のある東福寺の船木田の庄(八王子地区)の年貢をこの恩賞(彼も持氏から同文の恩賞状をもらっている可能性がある)に便乗して停止し、年限が切れても不払いをつづけ東福寺より訴えられている。有力地侍が年貢不払いを起こすのも時勢である。恩賞の拡大解釈など承知の上のことで、訴えたところで裁く力のあるものは既にもいない。東福寺の泣き寝入りは見込まれていた。

ところで、わが秋川流域の領主はどうなっているのだろうか。「禅秀の乱」後上杉(山内)氏が武蔵国守護となった。その後、公方持氏は死に、成氏は下総古河に追われ、武蔵は山内、扇ヶ谷兩上杉の支配下に入り多摩地区は山内の重臣で武蔵国「目代」大石氏が郡内の地侍たちを統括することになった。しかし一たび自主自由の行動の味を占めた地侍たちは目代=守護代の権威におそれることはない。大石氏も一揆集団の結束力には一目も二目も置かざるを得なかったようである。一揆の棟領小宮氏など小領主への道を志向したのではあるまいか。

この頃秋川谷では寺の創建があいついだ。これには地侍たちが実質的な開基(スポンサー)となっている。彼らの生活に余裕の生じた証拠と思える。強力な戦国大名後北条氏が秋川谷に姿をあらわすまで、まだ1世紀近い時差がある。この間の権力空白期が、当地の地侍にとって「最良の時代」といってもよさそうである。

3. 地侍の里 戸倉と北伊奈

五日市地区で地侍の優勢な地域は戸倉と北伊奈があげられる。地侍たちが主な造立者といわれる板碑(13~15世紀に流行した仏への供養塔で、死後の冥福を祈って建てる)の町内分布をみても、まず北伊奈に密集し、ついで戸倉から養沢谷に密度の濃いことがわかる。(五日市町史)

下表の「五日市地区寺院創立年表」(五日市町史にもとづき筆者作成)をみてもまず伊奈(横沢)に真言宗大悲願寺が建ち、戸倉には光厳寺以前に慶雲寺という天台道場があったことがわかる。慶雲寺の創立は不詳だが、恐らく鎌倉期であろう。いずれにせよ秋川谷の先進地戸倉と伊奈に、天台・真言の二寺が相對峙していた時があった。しかし、鎌倉期はまだ当地地侍層の成熟が不充分とみえ、大悲願寺ですら衰微を辿り、1273以降は無住の廃寺状態がつづいた。結局寺院の本格的開設は南北朝に入ってからで、その口火を切ったのが光厳寺である。鎌倉の禅宗寺院は14世紀に入ってから各地に末寺を建て、勢力の伸長を計ったといわれる。当地地侍層の欲求と寺院側の積極的姿勢が一致し、建長寺の肩入れがあり、天台道場を敢て禅宗寺に宗旨がえしたものと思われる。光厳寺が早速北伊奈地区に松岩寺と明光寺の二寺を興した。これは北伊奈にそれなりの人口、それをささえる農地、それをまとめる有力者=地侍がいた何よりの証拠であろう。又戸倉地区と北伊奈地区との連係(現在はたどる由もない)の深さを想像させる。

平成3年8月から、都市計画道路「秋3・5・2号線」の工事にともなう発掘調査が行われた。場所は北伊奈松岩寺前地区である。その「水草木遺跡」より青磁鎚蓮弁文碗と常滑の破片が発掘されたが、出土した土坑(穴)は墓穴とも考えられる数多い土坑群の一つであった。青

五日市地区寺院創立年表

年	寺名	本寺	開基	開山	所在地・その他
1191	○ 大悲願寺	醍醐寺	平山季重	澄秀	横沢
1334	□ 光厳寺	建長寺	足利尊氏	建長寺38世	戸倉・前身天台宗慶雲寺
1339	玉林寺	光厳寺	平山氏	明叟齊哲禅師	五日市小能
1340~50	○ 瑞雲寺	〃	足利基氏母	大光禅師	山田
1357	○ 松岩寺	〃	?	光厳寺2世	伊奈
1360	大悲願寺再興	醍醐寺		澄遍	
1362	○ 明光寺	光厳寺	?	光厳寺9世	伊奈
1363	□ 竜珠院	〃	竜珠軒~首座	光厳寺10世	乙津
1373	広徳寺	建長寺	正応長者	建長寺70世	小和田
1398	能満寺	広徳寺	足利基氏母	建長寺70世	網代一山田へ移る
1444~48	福寿院	〃	?	明天察禅師	小机
1448	開光院	〃	入野宗真	広徳寺2世の弟	五日市入野
1470	□ 普光寺	光厳寺	星竹山下・黒山氏	光厳寺17世	戸倉星竹
1476	楞厳寺	広徳寺	北寒寺部落	開光院開山の弟子	五日市入野
1481	徳蔵寺	〃	?	柏芳樹禅師	小倉
1486	真光院	〃	太田道灌	梅岑祖香禅師	深沢
1502	大光寺	大悲願寺	平山氏	秀等法印	高尾

(注) ○ 伊奈周辺

□ 戸倉周辺

開基開山は寺伝による

磁は中国よりの渡来品であり、鎬蓮弁文は中世期の文様である。この青磁碗の使用者は一般の農民とは考えられない。

唐物^{からもの}として貴重品視された品を調度として使用しうる人物が当地にいたことは北伊奈地区を考えるうえで参考にされてよい。

平成4年12月、東京国立博物館研究室長山本勉氏が戸倉武多摩神社の毘沙門天像を調査されたが、この毘沙門天（四天王か二天像の一つとして造られた可能性もある。）は平安後期（12世紀）のもので、年代の古さからみて貴重な品と認定された。

武多摩神社は、かつては慶雲寺持ちの不動堂で、地侍たちの集会所でもあったと聞く。この毘沙門天像は、折りにふれては会合し、情報を交換したり、出陣の可否を論じ合った南一揆衆の姿を見知っている筈である。

町指定文化財の一つに天文16年（1547）12月大悲願寺本堂破風修造時の棟札がある。ここに「大檀那小宮孫四郎綱清」と「富倉大方^{とくらおおかた}」「萩原庄左衛門」らがスポンサーとして名を連ねている。「大檀那」は寺の創設者等に対する呼称で大悲願寺と小宮氏の関係の深さを示す。また「富倉大方」は天文12年広徳寺の本尊を修覆した「富蔵内」と同一人物であると見られる。戸倉氏の夫人（母堂）である。又「萩原庄左衛門」は戸倉萩原一族の本家で江戸期も名主をつとめた家と推定される。横沢の大悲願寺に戸倉地区の有力者が喜捨しているのも、戸倉・伊奈二拠点の交流を裏づける。

尚さきあげた東京国立博物館の山本氏は、広徳寺の本尊をみて、南北朝期に流行した「宝冠釈迦」で、聖観音像ではない。作製年代は広徳寺創建時（1373）の14世紀後半であろうと認定された。筆者が平成3年11月『郷土あれこれ33号』に天文12年に新造したと紹介したのは誤りであった。この機会に訂正する。

4. おわりに 南一揆の終焉^{えん}

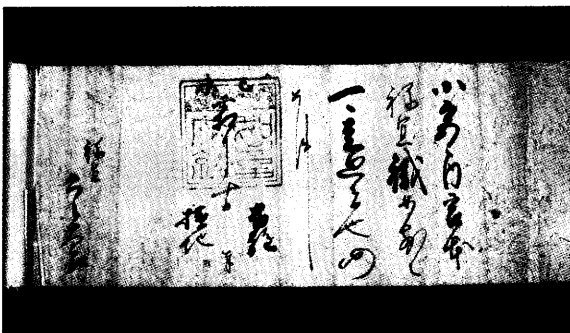
南一揆はいつ結成され、いつ解体したか。これを最後の考察としよう。

南一揆は南一揆文書の上限応永20年（1413）以前から存在したであろう。尤も種々の状況証拠はあるが、正確には一揆の盟約書でも出てこないことにはわからない。ただ地侍の活動する時代になったのは、当地では南北朝期とみて間違いないし、地侍相互に交流連帯がはじまったのも南北朝初期とみられる。南北朝の動乱が、各地の地侍に団結を必要とさせ、南北の旗色を鮮明にさせた。光厳寺の寺伝「後光厳院がご滞在になった」という話は

北朝系地区の寺院によく聞く話のようである。

それでは解体はいつか。

永正7年（1510）小田原の北条早雲と上杉側の対決が現横浜市の権現山であった。その時南一揆が上杉氏配下で従軍したとの記録がある。（『武家事記』山鹿素行編）南一揆の動静を知る最後の記事である。天文15年（1546）武州川越で大きな合戦があった。山内・扇ヶ谷^{やまのうち おおきかやつ}と分かれ内紛を繰り返してきた両上杉家が、後北条氏のあくなき侵出にたまりかね、力を合わせていどんだ決戦である。結果は北条氏康の捨身の夜襲でできた。これは画期的な戦いで、扇谷上杉家の当主は討死、山内上杉氏は上野へ逃れ、大石氏も降服。南関東は北条氏の制するところ



宮本家にある北条氏照印判状「如意成就」印の初期のものとして注目されている。

となった。大石氏の居城、滝山城には北条氏照が乗り込んだ、まもなく永禄2年（1559）戸倉の三島神社神宮宮本家に、氏照より印判状が届いた。「小宮之内、宮本^{おのき}禰直職、如^{またまえのごとくほしりまわらるべきものなり}前々可走廻者也」要するに北条氏に忠勤を上げめということで、南一揆の本拠に懐柔の手を伸ばしたものである。4年後の永禄6年、青梅の三田氏は北条氏によって討滅された。これには秋川谷の地侍もふるえ上ったことであろう。南一揆は解体、個々に北条氏家臣団に編成替えさせられてしまった。この際小宮氏本家は何らかの処置がとられたのではないか。小宮氏については本貫の地も墓所も不明で不自然なことが多い。

また北条氏は広徳寺をことさら優遇し、寺領の安堵状などを残している。光厳寺に対しては南一揆の巢窟と見なしてか、冷遇したように思えてならない。

思えば後北条氏が秋川谷に姿をあらわしてから、滅亡を迎えるまで、約30年の短い年月にすぎない。併しその印象はあまりに強く、後世のわれわれにとって中世といえば後北条氏が大きく立ちはだかり、それ以前の長い地侍時代、自主と自由を謳歌した時代はかすんでしまった。歴史認識の上でこれは正常の姿ではない。（文責・石井）